

女客

泉鏡花

青空文庫

「謹さん、お手紙、」

と階子段はしごだんから声を掛けて、二階の六畳へ上り切らず、欄干てすりに白やかな手をかけて、顔を斜ななめに覗のぞきながら、背後うしろむ向きに机に寄つた当家の主人あるじに、一枚を齎もたらした。

「憚り、」

と身を横おほに、蔽おほうた燈ともしびを離れたので、玉ぼやぎよくを透かした薄あかりに、くつきり描き出された、上り口の半身は、雲の絶間の青柳あおやぎ見るよう、髪も容かたちもすつきりした中年増ちゆうどしま。

これはあるじの国許くにもとから、五ツになる男の児こを伴うて、この度上京、しばらくここに逗留とうりゆうしている、お民といつて縁続き、一蔭あるまきえし絵師の女房である。

階下したで添乳そえちをしていたらしい、色はくすんだが艶つやのある、藍あいと紺たてじま、縦縞たてじまの南部あわせの袴くつろの襷たもとのなり、ふつくりとした乳房の線、幅細く寛いで、昼夜帯の暗いのに、緩く纏まとうた、縮緬ちりめんの扱帯しごきに蒼味あおみのかかったは、月の影のさしたよう。

燈火ともしびに対して、瞳清すずしゆう、鼻筋がすつと通り、口許くちもとの緊しまつた、瘦やせぎすな、眉の

きりりとした風采とりなりに、しどけない態度なりも目に立たず、繕つくろわぬのが美しい。

「これは憚り、お使い柄恐おそれい入ります。」

と主人は此方こなたに手を伸ばすと、見得もなく、婦人おんなは胸を、はらんばいになるまでに、ずつと出して差置くのを、畳をずらして受取つて、火鉢の上でちよつと見たが、端書はがきの用は直ぐに済んだ。

机の上に差置いて、

「ほんとに御苦勞様でした。」

「はいはい、これはまあ、御丁寧ごあいさつな、御挨拶ごあいさつ痛み入りますこと。お勝手からこちらまで、随分遠方はなでござんすからねえ。」

「憚り様ね。」

「ちつとも憚り様なことはありません。謹さん、」

「何ね、」

「貴下あなた、その（憚り様ね）を、端書はがきを読む、つなぎに言ってるのね。ほほほほ。」

「謹さんも莞爾にっこりして、

「お話しなさい。」

「難有う、」

「さあ、こちらへ。」

「はい、誠にどうも難有う存じます、いいえ、どうぞもう、どうぞ、もう。」

「早速だ、おやおや。」

「大分丁寧でございました。」

「そんな皮肉を言わないで、坊やは？」

「寝ました。」

「母は？」

「行火で、」と云つて、肱を曲げた、雪なす二の腕、担いだように寝て見せる。

「貴女にあまえているんでしょう。どうして、元気な人ですからね、今時行火をしたり、

宵の内から転寝をするような人じゃないの。鉄は居ませんか。」

「女中さんは買物に、お汁の実を仕入れるのですつて。それから私がお道楽、翌日は田舎

料理を達引こうと思つて、ついでにその分も。」

「じゃ階下は寂しいや、お話しなさい。」

お民はそのまま、すらりと敷居へ、後手を弱腰に、引っかけの端をぎゅうと撫で、軽く

衣紋えもんを合わせながら、後姿の襟清く、振返つて入ったあと、欄干てすりの前なる障子を閉めた。

「ここが開あいていちや寒いでしょう。」

「何だかぞくぞくするようね、悪い陽気だ。」

と火鉢を前へ。

「開あツ放はなしておくからさ。」

「でもお民さん、貴女が居るのに、そこを閉めておくのは気になります。」

時に燈に近う来た。瞼まぶたに颯さつと薄うす紅くれない。

二

坐すわると炭取を引寄せて、火箸ひばしを取つて俯向うつむいたが、

「お礼に継いで上げましょうね。」

「どうぞ、願ねがいます。」

「まあ、人様のもので、義理をするんだよ、こんな吞氣のんきツちやありやしない。串戲じょうだんは

よして、謹こつちさん、東京は炭が高いんですつてね。」

主人は あるじ 大胡座 おおあぐら で、落着澄まし、

「吝 けち なことをお言いなさんな、お民さん、阿母 おふくろ は行火 あんか だというのに、押入には葛籠 つづら へ入つて、まだ蚊帳 かや があるという騒ぎだ。」

「何のそれが騒ぎなことがあるもんですか。またいつかのように、夏中蚊帳が無くつては、それこそお家は騒動ですよ。」

「騒動どころか没落だ。いや、弱りましたぜ、一夏は。」

何しろ、家の焼けた年でしょう。あの焼あとというものは、どういいうわけだか、恐しく蚊が酷 ひど い。まだその騒ぎの無い内、当地 こちら で、本郷のね、春木町の裏長屋を借りて、夥間 なかも と自炊をしたことがありましたつけが、その時も前の年火事があったといつて、何年にもない、大変な蚊でしたよ。けれども、それは何、少 わか いもの同志だから、萌黄緘 もえぎおどし の鎧 よろい はなくとも、夜 よつび 一夜、戸外 おもて を歩行 ある していたつて、それで事は済みました。

内じゃ、年よりを抱えていきましょう。夜が明けても、的 あて はないのに、夜中一時二時まで、友達の許 とこ へ、苦 くる い時の相談の手紙なんか書きながら、わきで寝返りなさるから、阿母 おつか さん、蚊が居ますかかって聞くんです。

自分の手にや五ツ六ツたかっているのに。」

あるじ
主人は火鉢にかざしながら、

「居ますかもないもんだ。」

ああ、ちつと居るようだと、と何でもないように、言われるんだけれども、なぜ阿母には居るだろうと、口惜くやしいくらいでね。今に工面してやるから可いい、蚊の畜生覚えていろと、無念むねんこつずい骨髓こつずいでしたよ。まだそれよりか、毒虫のぶんぶん矢を射るような烈はげしい中に、疲れて、すやすや、……傍わきに私の居るのを嬉しそうに、快よきそうに眠られる時は、なお堪たまらなくって泣きました。」

聞く方が歎息して、

「だつてねえ、よくそれで無事でしたね。」

顔見られたのが不思議なほどの、懐かしことばそうな言であつた。

「まさか、蚊に喰殺されたという話もない。そんな事より、恐るべきは兵糧ひょうりょうでしたな

。」

「そうだつてねえ。今じゃ笑あはいばなしになつたけれど。」

「余りそうでもありません。しかしまあ、お庇かげさま様、どうか蚊帳もありませんから。」

「ほんとに、どんなに辛かつたらう、謹あなさん、貴下あなた。」と優しい顔。

「何、私より阿母ですよ。」

「伯母さんにも聞きました。伯母さんはまた自分の身がかせになって、貴下が肩が抜けないし、そうかといつて、修行中で、どう工面の成ろうわけはないのに、一ツ売り二つ売り、一日だてに、段々煙は細くなるし、もう二人が消えるばかりだから、世間体さえ構わないなら、身体からだ一ツないものにして、貴下を自由にしてあげたい、としよっちゅうそう思つていらしたつてね。お互に今聞いても、身ぶるいが出るじゃありませんか。」

と顔を上げて目を合わせる、兩人の手は左右から、思わず火鉢をおき压えたのである。

「私はまた私で、何です、なまじ薄うす髯ひげの生えた意気地のない兄あにい哥ごがついているから起つて、相応にどうか遣やり繰くりつて行ゆかれるだろう、と思つから、食くい物ものの足りぬ阿母を、世間でも黙つて見ている。いっそ伴せがれがないものと極きまつたら、たよる処も何にもない。六十を越した人を、まさか見殺しにはしないだろう。

やつちまおうかと、日に幾いくたび度考えたかね。

民さんも知つていましょう、あの年は、城ほりの濠ほりで、大層投みなげ身み者ものがありました。」

同おなじ一い年どしの、あいやは、姉あねさんのような領うなずき方。

「ああ。」

三

「確か六七人もあつたでしょう。」

お民は聞いて、火鉢のふちに、算盤そろばんを弾はじくように、指を反らして、

「謹さん、もつとですよ。八月十日の新聞までに、八人だつたわ。」

と仰いで目を細うして言った。幼い時から、記憶の鋭い婦人である。

「じゃ、九人になる処あなただつた。貴女の内へ遊びゆびに行くと、いつも帰りが遅くなつて、日が

暮れちや、あの濠端ほりばたを通つたんですがね、石垣いしゐが蒼あおく光つて、真黒まっくろな水の上から、む

らむらと白い煙けむりが、こつちに這はいかかつて来るように見えるじゃありませんか。

引込まれては大変だと、早足あそに歩行あるき出すと、何だかうしろから追おい駈かけるようだから、

一心いっしんに遁にげ出してき、坂の上で振返ると、凄すこいような月で。

ああ、春の末でした。

あとについて来たものは、自分の影法師ばかりなんです。

自分の影を、死神と間違えるんだもの、御覧なさい、生きている瀬はなかつたんですよ

」。

「心細いじやありませんか、ねえ。」

と寂しさみそうに打傾おもてく、面に映うつつて、頸うなじをかけ、黒くろ繻じゆ子の襟えりに障子の影、薄うすら蒼あざく見えるまで、戸外おもては月の冴さえたる氣勢けはい。カラカラと小刻こきぎとみに、女の通る下駄げだの音、屋敷町に響いたが、女中はまだ帰かへつて来ない。

「心細いのが通り越して、気が変かへになつていたんです。

じや、そんな、気味の悪い、物凄ものぞろい、物凄ものぞろい、死神のさそうような、厭いやな濠端うへを、何の、お民さん。通とほらずとももの事ことだけれど、なぜかまた、わざとにも、そこを歩行あるいて、行過ゆきぎてしまつてから、まだ死しなないでいるつて事を、自分で確たしかめて見みたくてならんのでしたよ。

危険けんのんせんぼん 千万。

だつて、今いまだから話わすんだけれど、その蚊帳かやなしで、蚊かが居ゐるツていう始末はつまつでしょう。無いものは活計たつきの代しろという訳わけで。

内で熟じつとしていたんじや、たとい曳ひくにしろ、車くるまも曳ひけない理窟りくつですから、何がなし、戸外おもてへ出でて、足駄あしだ穿はきで駄だけ歩行あるくしだらだけれど、さて出でようとすると、気きになるから、上ありがまちへ腰こしをかけて、片足履物かたあしぞうりをぶら下さげながら、母おつかさん、お米こめは？ ツて聞きくんです。」

「お米は？ ツてね、謹さん。」

と、お民はほろりとしたのである。あるじはあえて莞爾やかに、

「恐しいもんだ、その癖両に何升どこは、この節かえつて覚ええました。その頃は、まったくです、無い事は無いにしろ、幾許するか知らなかった。

皆、親のお庇だね。

その阿母が、そうやって、お米は？ ツて尋ねると、晩まであるよ、とお言いなさる。

翌日のが無いと言われるより、どんなに辛かったか知れませんが。お民さん。」

と呼びかけて、もとより答を待つにあらさず。

「もう、その度にね、私はね、腰かけた足も、足駄の上で、何だって、こう脊が高いだろう、と土間へ、へたへたと坐りたかった。」

「まあ、貴下、大抵じやなかったのねえ。」

フトその時、火鉢のふちで指が触れた。右の腕はつけ元まで、二人は、はっと熱かったが、思わず言い合わせたかのごとく、鉄瓶に当って見た。左の手は、ひやりとした。

「謹さん、沸しましうかね。」と軽くいう。

「すっかり忘れていた、お庇さまで火もよく起つたのに。」

「お湯があるかしら。」

と引つ立てて、蓋ふたを取つて、燈あかりの方に傾けながら、

「貴下。ちよいと、その水差しを。お道具は揃つたけれど、何だかこの二階の工合が下宿のようじゃありませんか。」

四

「それでもね、」

とあるじは若々しいもので、

「お民さんが来てから、何となく勝手が違つて、ちよつと他所よそから歸つて来ても、何だか自分の内うちのようじやないんですよ。」

「あら、」

とて清すずしい目を睜みはり、鉄瓶の下に両手を揃えて、真直まっすぐに当りながら、

「そんな事を言うもんじやありません。外へといつては、それこそ田舎の芝居一つ、めつたに見に出た事もないのに、はるばる一人旅で逢あいに来たんじやありませんか、酷ひどいよ、

「謹さんは。」

と美しく打怨うちえんずる。

「飛んだ事を、ははは。」

とあるじも火に翳かげして、

「そんな気でいった、内らしくないではない、その下宿屋らしくないと言ったんですよ。」

「ですからね、早くおもらいなさいまし、悪いことはないません。どんなに気がついて、

しんせつでも、女中じや推切おしきつて、何かすることが出来ませんからね、どうしても手が届

かないがちになるんです。伯母さんも、もう今じや、蚊帳よりお嫁よめが欲ほしいですよ。」

あるじは、屹きつと頭かぶりを掉ふった。

「いいえ、よします。」

「なぜですね、謹さん。」と見上げた目に、あえて疑うたがの色はなく、別に心あつて映つたの

であつた。

「なぜという議論になります。ただね、私は欲くないんです。」

こういえば、理窟もつけよう、またどうこうというけれどね、年よりのためにも他人の交まじらない方が気楽で可いいかも知れません。お民さん、貴女あなたがこうやって遊びに来てくれた

つて、知らない婦人が居ようより、阿母と私ばかりの方が、御馳走は届かないにした処で、水入らずで、気が置けなくつて可いじやありませんか。」

「だつて、謹さん、私がこうして居いたために、一生貴方、奥さんを持たないでいられますか。それも、五年と十年と、このままで居たいだつて、こちらに居られます身体じやなし、もう二週間の上になつたつて、五日目ぐらいから、やいやい帰れつて、言つて来て、三度めに来た手紙なんぞの様子じや、良人の方の親類が、ああの、こうのつて、面倒だから、それにつけても早々帰れじやありませんか。また貴下を置いて、他に私の身についた縁者といつてはないんですからね。どうせ帰れば近所近辺、一門一類が寄つて集つて、」
と婀娜に唇の端を上げると、顰めた眉を掠めて落ちた、鬢の毛を、焦つたそうに、背へ投げて搔上げつつ、

「この髪を撈りたくなるような思いをさせられるに極つてるけれど、東京へ来たたら、生意氣らしい、氣の大きくなつた上、二寸切られるつもりになつて、度胸を極めて、伯母さんには内証ですがね、これでも自分で呆れるほど、了簡が据つていますけれど、だつてそうは御厄介になつても居られませんもの。」

「いつまでも居て下さいよ。もう、私は、女房なんぞ持とうより、貴女に遊んでいてもら

う方が、どんなに可いから知れやしない。」

と我儘わがままらしく熱心に言った。

お民は言ことばを途切らしつ、鉄瓶はやや音ねに出づる。

「謹さん、」

「ええ、」

お民は唾つをのみ、

「ほんとうですか。」

「ほんとうですとも、まったくですよ。」

「ほんとうに、謹さん。」

「お民さんは、嘘だと思つて。」

「じゃもういっそ。」

と烈はげしく火箸ひばしを灰について、

「帰らないでおきましようか。」

我を忘れてお民は一気に、思い切つていいかけた、言ことばの下したに、あわれ水ならぬ灰にさえ、
 かず書くよりも果敢はかなげに、しよんぼり肩を落したが、急に寂さみしい笑顔を上げた。
 「ほほほほ、その気で沢山たん御馳走をして下さいまし。お茶ばかりじゃ私は厭いや。」
 といううち涙さしぐみぬ。

「謹さん、」

というも曇り声に、

「も、貴下あなた、どうして、そんなに、優やさしくいつて下さるんですよ。こうした私じゃありませんか。」

「貴女あなたでなくツて、お民さん、貴女は大恩人なんだもの。」

「ええ？ 恩人ですつて、私が。」

「貴女が、」

「まあ！ 誰方どなたのねえ？」

「私のですとも。」

「どうして、謹さん、私はこんなぞんざいだし、もう十七の年に、何にも知らないで児持こもち

になつたんですもの。碌ろくに小袖一つ仕立つて上げた事はなく、貴下が一生の大切だいじだった、そのお米のなかつた時も、煙草たばこも買つてあげないでさ。

後で聞いて口惜くやしくつて、今でも怨うらんでいるけれど、内証の苦しい事つたら、ちつとも伯母さんは聞かして下さらないし、あなたの御容ごようす子でも分りそうなものだったのに、私わがが気がつかないからでしょうけれど、いつお目にかかつて、元氣よく、いきいきしてねえ、まったくですよ、今なんぞより、寔やっれてないで、もつと顔色も可よかつたもの……」

「それです、それですよ、お民さん。その顔色の可よかつたのも、元氣よく活いきいき々きしていたのだから、貴女、貴女の傍そばに居る時の他ほかに、そうした事を見た事はありますまい。

私はもう、影法師が死神に見えた時でも、貴女に逢えば、元氣が出て、心が活々したんです。それだから貴女はついで、ふさいだ、陰氣な、私の屈託顔を見た事はないんです。

ねえ。

先刻さつきもいう通り、私の死んでしまった方が阿母おふくろのために都合よく、人が世話をしようと思つたほどで、またそれに違いはなかつたんですもの。

実際私は、貴女のために活いきていたんだ。

そして、お民さん。」

あるじが落着いて静しずかにいうのを、お民は激しく聞くのであろう、潔白なるその顔かんばんせに、湧わ上きのほるごとき血汐ちしおの色。

「切迫せつぱつ詰まつて、いざ、と首の座に押直る時には、たとい場処どころが離れていても、きつと貴女の姿が来て、私を助けてくれるツて事を、堅くね、心の底に、確たしかに信仰していたんだね。まあ、お民さん許とこしで夜更よふかしして、じゃ、おやすみつてお宅を出る。遅い時は寝衣ねまきのなりで、寒いのも厭いとわないで、貴女が自分で送つて下さる。

門かどを出ると、あの曲角あたりまで、貴女、その寝衣のまままで、暗やみの中まで見送つてくれたでしょう。小児こどもが奥で泣いている時でも、雨が降っている時でも、ズツと背中まで外へ出して。

私はまた、曲り角で、きつと、密そつと立停たちどまって、しばらく経たつて、カタリと枢くるるのおりるのを聞いたんです。

その、帰り途みちに、濠端ほりばたを通るんです。枢は下りて、貴女の寝た事は知りながら、今にも濠へ、飛込もうとして、この片足が崖がけをはずれる、背後うしろでしつかりと引き留めて、何をすの、謹さん、と貴女がきつというたしかと確たしかに思った。

ですから、死のうと思ひ、助かりたい、と考えながら、そんな、厭いやな、恐ろしい濠端を

通つたのも、柩をおろして寝なすつた、貴女が必ず助けてくれると、それを力にしたんです。お底かげで生きていたんですもの、恩人でなくツてさ、貴女は命の親なんですよ。」

とただ懐かしげに嬉しそうにいう顔を、じつと見る見る、ものをもいわず、お民ははらはらと、薄曇る燈ともしびの前に落涙した。

「お民さん、」

「謹さん、」

とばかり齒をカチリと、堰せきあえぬ涙を嚙かみ留めつつ、

「口についていうようでおかしいんですが、私もやっぱり。貴下は、もう、今じゃこんなにおなりですから、私は要らなくなつたでしょうが、私は今も、今だって、その時分から、何ですよ、同じおんななんです、謹さん。慾よぐにも、我慢にも、厭で厭で、厭で厭で死にたくなる時がありますとね、そうすると、貴下が来て、お留めなさると思つてね、それを便りにしていますよ。」

まあ、同じようでも不思議だから、これから別れて帰りましたら、私もまた、月夜にお濠端あるを歩行きましょう。そして貴下、謹さんのお姿が、そこへ出るのを見ましようよ。」
と差俯さしうつむ向いた肩が震えた。

あるじは、思わず、火鉢なりに擦り寄って、

「飛んだ事を、串じょうだん戯たわぶじやありません、そ、そ、そんな事をいって、讓ゆる（小児の名）さんををどうします。」

「だって、だって、貴下がその年、その思いをしているのに、私はあの児こをこ拵しらえました。そんな、そんな児を構うものか。」

とすねたように鋭くいつたが、露たをた湛たえた花はな片びらを、湯気やなぶると、笑えみを湛え、
「ようござんすよ。私はお濠たのしをた樂たみにしますから。でも、こんなじや、私の影かげじや、凄すごい
死神しんなら可いいけれど、大方いたち馳ちにでも見えるでしよう。」

と投げたように、片身を畳つに、褌つまも乱みれて崩くず折おれた。

あるじは、ひとと寄せて、押おえるように、棄すてた女の手を取って、

「お民さん。」

「……………」

「国へ、国へ帰しやしないから。」

「あれ、お待ちなさい伯母さんが。」

「どうした、どうしたよ。」

という母の声、下に聞えて、わつとばかり、その譲という児が。

「煩うるさいねえ！ちよいと、見て来ますからね、謹さん。」

とはらりと立つて、脛はぎ白はき、敷居際の立姿。やがてトントンと階下へ下りたが、泣き留やまぬ譲を横抱よこかきに、しばらくして品のいい、母親の形なりで座に返った。燈火の陰に胸の色、雪のごとく清らかに、譲はちゆうちゆうと乳を吸すって、片手で縫すがって泣いじやくる。

あるじは、きちんと坐すわり直すって、

「どうしたの、酷ひどく怯おびえたようだっけ。」

「夢を見たかい、坊や、どうしたのだねえ。」

と頬ほおに顔をかさぬれば、乳ちを含みつつ、愛らしい、大きな目をくるくるとやって、

「鼬おつかが、阿母さん。」

「ええ、」

二人は顔を見合わせた。

あるじは、居寄のぞつて顔を覗のぞき、ことさらに打笑うちわらい、

「何、内へ鼬おつかなんぞ出るものか。坊や、鼠ねじむの音を聞いたんだらう。」

小兒こどもはなお含こんだまま、いたいけに捻ねじむ向むいて、

「ううむ、内じやないの。お濠ほりン許とこで、長い尻尾で、あの、目が光って、私わたい、私わたしを睨にらんで、恐こわかったの。」

と、くると向いて、ひつたり母親のその柔かな胸に額うづを埋めた。

また顔を見合わせたが、今はその色も変らなかつた。

「おお、そうかい、夢なんですよ。」

「恐おそかつたな、恐おそかつたな、坊や。」

「恐おそかつたね。」

からからと格子が開いて、

「どうも、おそなりました。」と勝手にいって、女中が帰る。

「さあ、御馳走だよ。」

と衝つと立たつたが、早急さつきゆうだったのと、抱かいた重量おもみで、裳もすそを前まへに、よろよろと、お民は、

よろけながら段階だんばし子ご。

「謹かしこさん。」

「……………」

「翌朝あしたのお米こめは？」

と艶麗はでやかに莞爾にっこりして、

「早く、奥さんを持つて下さいよ。ああ、女中さん御苦勞でした。」
と下を向いて高く言つた。

その時襖ふすまの開く音がして、

「おそなわりました、御新造様ごしんぞさま。」

お民は答えず、ほど吐息。円鬚艶まげつややかに二三段、片頬かたほを見せて、羞覲さしのぞいて、

「ここは閉めないで行きますよ。」

明治三十八（一九〇五）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年10月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第九巻」岩波書店

1942（昭和17）年3月30日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女客

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>